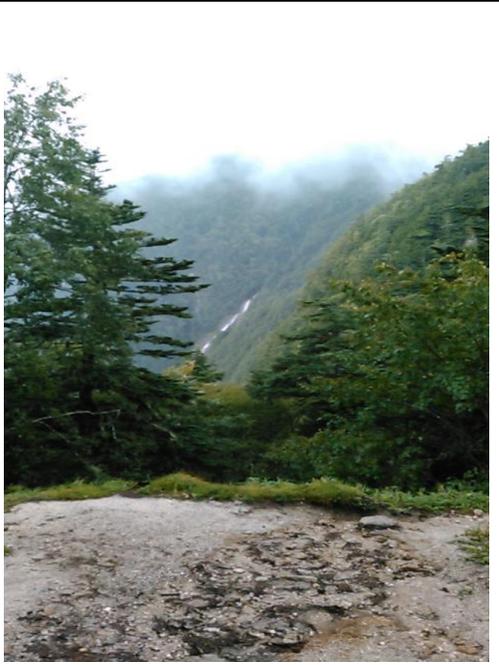


## 山 行 報 告 書

山行報告者：加藤

山 域・山 名：甲斐駒ヶ岳（黒戸尾根～北沢峠）（2965.5m）（山梨県北杜市）	
入山日又は期間：平成30年9月6日(木)～8日(土)（2泊3日）前泊含む	
参 加 者	加藤
天候 終日雨	
(写真は五合目小屋跡地から見えた滝☞)	
月 日( )	集合時間： 午前 時 集合場所：
9月6日 (木) 前泊	12:20 南浦和駅から武蔵野線～西国分寺を經由して立川駅、13:22 特急あずさ17号松本行に乗車～14:40 韮崎駅下車 15:30 韮崎駅発、下教来石行きバスに乗車～16:10 道の駅はくしゅうバス停で下車、車道歩きの途中ヒッチハイク(?)で竹宇駒ヶ岳神社まで乗せて頂く 参拝後、神社そばのキャンプ場にテント前泊
9月7日 (金)	3:00 起床、テント撤収、4:30 神社を出発～9:00 刀利天狗通過～11:00 七丈小屋到着、(テント泊を中止し小屋泊り、翌日は北沢峠下山に変更)
9月8日 (土)	3:30 起床、5:00 朝食、5:30 小屋を出発、8:00 山頂を通過～駒津峰・双児山を経て10:30 北沢峠着、休憩、昼食～13:30 広河原行のバスに乗車、15:55 甲府駅着、16:10 特急かいじに乗車～17:25 立川駅着～18:00 南浦和駅に着く
装 備 と 食 糧	個人食：6日(夕)、7日(朝昼夕)、8日(朝)+行動食・非常食 個人装備：ヘッドランプ、雨具、防寒衣、コンパス、地図、テント一式、シュラフ、シュラフカバー、マット、カートリッジ、コッヘル、ストーブ、着替え、衛生用品、、ストック、ヘルメット、グローブ、携帯電話、携帯ラジオ、水1.5ℓ、食料、予備電池
感 想	二日間とも雨の山行だった。普段は雨合羽登山は敬遠しているが、「行けるところまで行く、ダメなら即引き返す」という気持ちで、思い続けてきた甲斐駒に向かった。 麓のキャンプ場で迎えた早朝2時、テントをポツポツたたく音がし始め、登山開始から1時間もしないうちに汗と雨でずぶ濡れになった。(次ページへ)

気温も20度を下回っており、樹林帯では何ともなくても、鞍部の通過の際には吹き上げてくる風が氷の塊のようだった。途中、一組の中年夫婦が追いつき、一瞬互いに憐れむようにしげしげと見つめ合った後、なんだかおかしくなって笑いあい、「ゆっくり行こう。いつかは小屋に着く」とエールを交わしてまたそれぞれ黙々と登り続けた。計画段階では、強気に仙水小屋まで一気に行くつもりだったが、今回は小屋に泊まって明日山頂を越え、北沢峠に下ろう、とここで決心した。

登り初めて6時間半、11時ようやく七丈小屋に到着。宿泊手続きを終え、濡れたものをストーブにあぶりながらついでに自分もあぶりながら、先ほどの夫婦と山談議に花が咲き、他に客がない気安さと岩場の緊張感からの解放もあって、マシンガントークの応戦。栃木から来たこの二人、百戦錬磨の強者夫婦で、その山にまつわる「武勇伝」には大爆笑の連続だった。そのうちにちらほらと登山者が小屋に到着し(あの雨の中!)、それぞれザックの整理に没頭し始めるうちに夕食。

百名山の甲斐駒のビデオを皆で見て早々に就寝。みな明日の天気の話をしていた。

翌日も雨は降りやまず、朝食後すぐに山頂に向けて出発したのは、この夫婦と単独の男性と自分の4名。あっという間に彼らは先へ見えなくなり、視界ゼロ・横殴りの暴風雨の中、一人じわじわてっぺんを目指した。

レインウェアなどまるでもう役に立っておらず、寒さと言い雨風のすさまじさと言い、四方八方から氷の塊に全身を殴られている感じだった。

岩に剣が二本、まっすぐに突き刺さっているのが嵐の向こうにぼんやり見え、写真で見慣れた光景とはいえ、この山はやっぱり「意思がある」と妙な確信を持つ。

山頂から下りてきた夫婦や男性と短い挨拶とエールを交わしあい、いよいよ本当に一人の山越えとなった。

山頂の向こうへ下り始めた途端、今度は雨が「下から降ってきた」。あまりの風の強さに息ができず、口を覆って砂地を歩く。

雨を吸ってずっしり重いザックが逆に良い重しとなり、目印を追いながら一步一步慎重に進む。駒津峰から仙水峠方向に尾根を降りかけたら、まるで洗車マシンの中にいるような「歓迎」を受けてまた登り返し、「風向きよ変われ!」と山伏の如くに祈りながら今度は双児山方向に降り始めたところこれが大正解。幾分風の威力が弱まり、樹林帯まで一息に下る。そこまで来ると、一人二人と他の登山者が登ってくるのに会い始め、さっきまで半泣きだったくせに「上は風が強いから気を付けて!」と神妙な顔つきで「助言」し始める自分が可笑しかった。

七丈小屋を出発してから5時間、結局雨はやまなかったが無事北沢峠に到着し、バス時間までこまれば山荘の薪ストーブでシシカバブのように回転しながら全身を乾かした。

このカレースープがまた絶品で、ほろほろに煮込んだ骨付き肉と丸ごと一個のジャガイモなどが入っていてとてもおいしかった。量はもの足りなかったが。

黒戸はひたすら急登と言われるが、同じ6、7時間の登り(テント担いで)で言うなら、雲取山の方がずっと疲労感があると感じた。一定のペースで無理せず登っていけば決して特別に過酷ではなく、それよりも重厚な林相の美しさや、数百mはあろうと思われる落差でそこそこに流れ落ちる滝筋などが一つの大きな意志を持った生き物のようで、それが口から嵐を吐き出しているイメージだった。この山にはやはりただならぬ何かがある気がした。

黒戸の森はとにかく林相が素晴らしかった。古い立派な巨木が空を覆い、若い木々がその樹間をびっしり埋め尽くしていた。倒れた巨木も古木も林床もみな瑞々しい苔に覆われて静かに力強く息をしていた。植林の山と違い、この山は意思を持って生きている気がした。次はもう少し穏やかな天気の時、黒戸から早川尾根の方へ下りたい。

今回もまた見ず知らずの方々に変にお世話になった。初日の車道歩きで車に乗せて下さった休暇中の夫婦、合羽の完璧な防水処理法を教えてくれたあの栃木のパワフル夫婦、山小屋の誠実なスタッフさん達、北沢峠から観音様のような優しい笑顔で見送ってくれた見知らぬ女性、その他、出会ったすべての人たちに不思議な縁を感じた山行だった。